

今なすべきは次なる 国家緊急事態への備え

渡辺利夫

拓殖大学学事顧問

後藤新平という一代の官僚政治家がいる。内務省衛生局長、台湾総督府民政長官、初代満鉄総裁、内務大臣、外務大臣、再度の外務大臣を経て、もう少しで宰相に手が届くまでにいたった人物である。後藤は須賀川医学校、福島県病院、愛知県病院などで医師として勤め、その実力を内務省初代衛生局長の長與専斎に認められ、そ

の後を襲つて第二代の局長となつた。しかし、局長在任中、「相馬事件」として当時のマスコミ界を賑わせた奇怪な「お家騒動」に巻き込まれ連座、五ヵ月に及ぶ入獄の後、無罪が証明され、牢を放された。無罪になったとはいへ入獄を余儀なくされた後藤に対する世間の風は冷たく、衛生局長の座を手放さざるを得なかつた。

戦争を勝利に導くものは、もちろん前線で戦う将兵である。しかし、日清戦争という日本初のこの大規模な対外戦争に勝利するには、戦線の後方にあって戦略の全体を練り、これにもとづく作戦指導に当たるという任務がある。戦略や作戦をスマートに展開するためには、軍事装備品の調達、補給、整備、修理ならびに兵士や装備品の輸送のための船舶の確保などの後方支援、要するに「兵站」の確保がきわめて大きな重要性をもつ。陸軍次官としての児玉の功績は、兵站においてみせた水際だ

ろん前線で戦う将兵である。しか

し、日清戦争といふ日本初のこの大規模な対外戦争に勝利するには、戦線の後方にあって戦略の全体を練り、これにもとづく作戦指導に当たるという任務がある。戦略や作戦をスマートに展開するためには、軍事装備品の調達、補給、整備、修理ならびに兵士や装備品の輸送のための船舶の確保などの後方支援、要するに「兵站」の確保がきわめて大きな重要性をもつ。陸軍次官としての児玉の功

業は、児玉は兵站と検疫事業とつた手腕であった。

もう一つ、特筆すべきものに戦争に勝利・凱旋する兵士の検疫事業がある。コレラ、マラリア、ペスト、アメーバ赤痢などに罹患した兵士を検疫なく帰郷させるわけにはいかない。悪疫の国内感染を入国前に何としても阻止しなければならない。日清戦争後に児玉の構想によつて実現した検疫事業は、当時の西欧にも類のない規模と効率性をもつて展開され列強を驚かせた。

検疫事業のフロントラインに位置する指揮官として児玉が抜擢したのが、後藤新平である。後藤新平という才気煥発の官僚政治家を存分に働かせるきっかけをつくったのは児玉である。児玉の幸運でもあつた。

日清戦争は日本の勝利に終わる、明治二十八年四月に日清講和条約が締結された。後藤が衛生局长を辞したのは日清戦争終焉の数カ月前のことだつた。日清戦争の大本営は広島城内に設置された。

わたなべ・としお 昭和十四年山梨県生まれ。三十八年 慶應義塾大学卒業後、筑波大学教授、東京工業大学教授などを経て、拓殖大学学長・総長を歴任。現在は拓殖大学学事顧問。公益財團法人オイスカ会長。専門は開発経済学、現代アジア経済論。

実際、児玉は兵站と検疫事業という軍政の功績により、日清戦争後の明治二十九（一八九六）年の十月には陸軍中将に昇格した。児玉とともに中将となつた十六人のうち、後方任務を担う軍政家としてただ一人の陸軍中将だった。十六人中、最年少でもあつた。

日清戦争と「コレラ禍」

戦争が終われば戦地から大量の兵士が帰還してくる。兵士の検疫をどうするか。陸軍次官の児玉が抱えた切迫の課題であつた。苦い記憶が児玉の脳裏をよぎる。明治

十年に西南戦争が勃発、戦線でコレラが発生、帰還する兵士を通じて国内各地にコレラ汚染を招いてしまった。痛恨の記憶である。往時、コレラは致死率が八割にも達する「死病」であった。明治十六（一八八三）年にロベルト・コッホによつてコレラ菌が発見されるまで、この感染症には打つ手は何もなかつた。

罹患者らしき者をみつけて、これを「避病院」といわれる隔離病舎に収容しておく以外に対処の手はなかつた。行政への不満と不信ははなはだしく「コレラ騒動」や「コレラ一揆」が頻発した。

日清戦争からの帰還兵は西南戦争に比べてはるかに多い。日清戦争での日本兵の戦死者は千四百十七人であつたが、病死者数が一万一千八百九十四人、とりわけコレラ

の汚染が著しい。検疫事業はのつぴきならない課題として児玉のうえにのしかかつた。

不遇をかこつ後藤のところに、

広島の大本営で野戦衛生長官を務める陸軍省軍医総監の石黒忠憲から連絡が入つた。石黒は西南戦争後のコレラ禍の惨状を目撃して経験した軍医だつた。最高位の軍医の石黒は、検疫の緊急性について陸軍中央や内務省に建議していった。日清戦争後の検疫事業を遂行できる人物は後藤をおいて他にないと石黒は考え、児玉に後藤を推薦した。あれだけの逸材を野においていいはずがない。石黒は後藤に広島の大本営で児玉に会つてやつてくれないかと誘う。相馬事件であわやとなつた後藤は、役人などもうこりごりだといつて首を縊に振らない。石黒も譲ら

すことは不可能とみて、宇品の似島、大阪の桜島、下関の彦島の三つの離島に検疫所を設置することに決した。離島で短期間に二十四万人の兵士を検疫するには、広大な敷地に四百棟以上の兵舎をつくり、大型の蒸気式消毒罐を相当数導入しなければならない。児玉は後藤にそう伝える。

後藤は、さすがに迅速な決断をする人物だと児玉を仰ぎみた。

後藤新平の抜擢

「後藤君、そのための経費はどうのくらいかかるか、直感でいいからいってみたまえ」

後藤は頭の中で計算機をぐるぐると回して、

「百万円くらいはかかりましょ

う」と答える。同席していた石黒が、「どうしてそんなにかかるのか」と問う。後藤が理由を説明しようとするや、児玉は遮り、

「百万円あればコレラの侵入を防ぐことができる」と君はいうんだね。よし、それでは百五十万円くらい出そなじやないか。君、軍部の役人になつてこの仕事をやらんか」

「そうはまいりません。私は相

馬事件への関与を疑われ逮捕、拘禁されて、牢から出てきたばかりです」

「君に頼むしかない。お国のがめだ。やつてくれ」

「それは申しますても、官制というものがあります。陸軍の方だとつて官制がありますから、私を高等軍医などに任命できるはずがありません」

「それでは、君の都合のいいよううに別に官制を出す。臨時陸軍検疫部官制をつくつて、部長を私がやり、事務長は後藤君、君がやればいい。予算は私が取つてくる。後の一時は、君に任す。どうか」

後藤は児玉の一瞬のこの決断に息をのみ、もはや断ることは不可能だと逡巡を振り払う。かくして、後藤は陸軍行政のこの重大任務の事務官長として検疫事業に携

わることになった。後藤は、後日、この時の児玉について次のように記している。

《鋭敏な人だと思つた。といふのは悪疫が流行すれば、百万や二百万の金は忽ち飛んでしまふという事が直ちに分かる丈けの頭があつた。当時の百万円は今の百万円とは違ふザット一千万円位に當る、児玉さんは其の百万円に驚かなかつた。それだけ大局を見る明があつて決断に躊躇しない人であると云う事が分つた》

似島での大検疫事業

—後藤の復権

大事業が開始された。明治二十

ず、結局のところ後藤は広島城内の大本営陸軍出張所に出向き、児玉と面会するにいたつた。後藤、児玉との初の見参である。

児玉は検疫事業は陸軍省で担おうと腹を固めていた。帰還兵は六月初旬から十月末までに二十四万人、一日に千六百人、多い時にはその三倍ほどの検疫が必要となる。それだけの数を一方所でこなすことは不可能とみて、宇品の似島、大阪の桜島、下関の彦島の三つの離島に検疫所を設置することに決した。離島で短期間に二十四万人の兵士を検疫するには、広大な敷地に四百棟以上の兵舎をつくり、大型の蒸気式消毒罐を相当数導入しなければならない。児玉は後藤にそう伝える。

後藤は、さすがに迅速な決断をする人物だと児玉を仰ぎみた。

八（一八九五）年六月初めから十
月末までの期限が設定され、その
間に数百艘の船舶と二十四万人の
兵士を検疫することになった。月
当たり四万八千人、多い時には一
日に五千人から六千人になる。似
島、彦島、桜島の三カ所、広島宇
品島沖の似島が九千三百坪と最大
規模である。

島の北方に安芸の小富士を仰ぐ
似島の南側の砂浜に検疫所を設
置、消毒場、宿舎、倉庫、避病
院、快復室、さらには汚物焼却
場、それに火葬場までが建設され
た。作業は、船舶検査、運搬、沐
浴、蒸気消毒、薬物消毒、船舶消
毒、焼却の順序で行われた。到着
した兵士は蒸気罐に未消毒物を積
みあげ、検疫のための作業服に着
替えさせられ、作業服の蒸気消
毒、身体の沐浴消毒を経て検疫に

この人物についていかと改めて
臍を固めた。

後に報じられた記録によれば、

この三カ所の検疫所で罹患が証明
された兵士の数は、真性コレラ三百
百六十九人、疑似コレラ三百十三
人、腸チフス百二十六人、赤痢百
七十九人であった。この数の罹患
者が検疫なくして国内の各地に帰
還していく場合の事態の深刻さ
は、いかばかりであったか。

戦争に明け暮れていた欧州諸国
は日本の検疫事業に強い関心を寄
せ、その規模と迅速性に称賛を惜
しまなかつた。鶴見祐輔『正伝
後藤新平』（第二巻「衛生局長時
代」、藤原書店）にはこう記される。

『後に編纂された「臨時陸軍
検疫部報告書」は、和文と英文
の二様に作成され、陸軍省から

向かうという順序で進められた。

最も重要なものが蒸気式消毒罐
である。衛生局時代とともに働き
き、ドイツ留学中にロベルト・コ
ッホ研究所で起居をともにした、
往時すでに世界に名を知られてい
た細菌学者・北里柴三郎の大いな
る助力を得て、十数基の大型蒸氣
式消毒罐が導入された。

蒸気式消毒罐内で十五分間、六
十度以上の高温の中で兵士を耐え
させれば、コレラ菌の大方は死滅
する。そういう設計だった。北里
もしばしば検疫所を訪れては消毒
の指導に当たつた。

検疫にいたる、時間のかかる煩
雑このうえない手順に、一刻もは
やく故郷に勝利の錦を飾りたいと
帰心矢のごとき兵士たちに大いな
る不満が募る。指揮を執る後藤に
対しての非難には囂々たるものがあ
った。

会つてまだいくらも経つていな
い。難題を果斷に次々とこなす児
玉の非凡な判断力をみて、後藤は

あつた。“これがあの酷い戦争を
戦い抜いた兵士を迎えるやり方
か”。不満は爆発寸前にまでにい
たる。暴動になりかねない。これ
には後藤も手を焼き尽くし、児玉
に訴える。児玉にはひらめきがあ
つた。

旅順に出陣していた征清大総督
の小松宮彰仁親王が五月二十二日
に凱旋される。親王を説得して、

兵士と同じ手順で検疫にのぞんで
いただければ兵士の不満は一気に
収まる、というのが児玉の直感で
あつた。親王は説得に諾として応
じた。一瞬に閃いた児玉の機略に
より、全兵士の憤懣は收まり、檢
疫事業が再開されることになつた。

国家緊急事態対処とは何か

以上は、明治時代のストーリー
である。民主制度・機構、人権・

日清戦争後のこの検疫事業の完
遂により、後藤は相馬事件の汚名
を雪ぐことができた。内務省衛生
局長に復職せよとの辞令を受け、
次いで第四代台湾総督に任命され
た児玉に同道、総督府民政長官と
して、「土匪」制圧、アヘン漸禁
策、土地・人口調査、南北縦貫鉄
道建設、基隆・高雄築港、糖業振
興、阿里山開発など、世界の植民
地経営史にその名を遺す数々の偉
業を成し遂げるにいたる。

わが国でも「改正新型インフル
エンザ等対策特別措置法」が成立
し、ようやく「緊急事態宣言」が
発せられた。しかし、国家緊急事
態に関する憲法規定が日本には不
在である。それゆえ宣言が出され
てもなお「要請」や「指示」とど
まり、罰則はない。私権制限に

も必要最小限の縛りがかかる。

明治の教訓は、少なくとも私どもに二つのことを語りかける。一

つは、コレラという往時にあっては治癒の方法がまるでなかつた感

染症に対して、限られた資源をあ

たうる限り凝集して事態に対処し

ようという危機意識、この危機意

識を指導者が共有了したこと。二つ

には、事態の対処にあたる指揮官

に有力な人材を抜擢・配置し、彼

らにほとんど全権を与えてことに

臨んだ、この二つに違ひない。

台湾を築いた 明治の日本人



『台湾を築いた明治の日本人』
(産経新聞出版)

理非は歴史が証明するという、気概と豪氣もあつたのであろう。耳を澄ませば、いくつもの国家緊急事態のことが聞こえてくる。中国による尖閣諸島侵攻、北朝鮮の核ミサイル攻撃、南海トラフ地震、首都直下型地震、重大サイバーチェック、テロリズム、ああ、想像すれば切りがない。

緊急事態とは、重大かつ即座に対応しなければならない、そういう事態のことである。人権や私権が日本の憲法においてきわめて大きな重要性をもつこと、これは誰も否定しない。否定してはならない。しかし、國家緊急事態を想定せず、平時の丸腰で事態に立ち向かうというのであれば、肝心の人権・私権それ自体が雲散霧消してしまう。

新型コロナ感染症の拡散が人々

を不安と恐怖に誘つてもう何ヵ月にもなる。それでも収束に向かわなかつたパンデミックはない。長期戦を覚悟しなければならないにしても、いざれは収束する。新型もやがては新型ではなくなり、制御可能なものとなろう。

その時、國家緊急事態を憲法に書き込む、そのための準備を肃々と進めていかねばならない。國家緊急事態において、なお人権・私権の遵守を言い募るのであれば、それは人権・私権の自殺である。われわれが今なすべきことは、新型コロナウイルスとの並大抵ではない過酷な戦いに身命を賭している、医療従事者を初めとする多くの関係者に深い敬意を表すると同時に、次なる緊急事態への対応に怠りなきを期することに他なるまい。